頭を射られたるぞといふ、さぐれば何とはしらずぬれわたりたり、手にあかく物付たれば、げに血なりけりと思て、さらんからにけしうはあらじ、ひきたてゝゆかんとて、肩にかけて行に、いやはやいかにものぶべくも覺ぬぞ、たゞはやくびを切としきりにいひければ、云にしたがひて打おとしつ、扨其首をつゝみて、大和國へ持て行て、此法師が家になげ入て、しかじかいひつることとて、とらせたりければ、妻子なきかなしみて見るに、更に矢の跡なし、むくろに手ばし負たりけるかと問に、しかにはあらず、此かしらの事計をぞいひつるといへば、いよ〳〵かなしみ悔れ共かひなし、おくびやうはうたてきもの也、左樣のこゝろぎはにて、かく程のふるまひしけんおろか也とぞ、

〔義經記二〕かゞみの宿にて吉次宿にがうとう入事

そも〳〵都ちかき所なれば、人目もつゝましくて、けいせいのはるかの末座に、しやなわう殿○源義經をなほしける、○中略その夜かゞみの宿にぶだうの事こそ有ける、その年は世中きゝんなりければ、出羽の國に聞ゆる、せんどうの大將に、ゆりの太郎と申ものと、越後の國に名をえたる、くびきのこほりの住人、ふぢさはの入道と申もの、二人かたらひしなのゝ國にこへて、さんのごんのかみの子息太郎、遠江國にかまの與一、するがの國におきつの十郎、上野にとよをかの源八、いげのものども、いづれも聞ゆるぬす人、むねとの者二十五人、そのせい七十人つれて、どうかいどうはすいびす、少よからん山家々々にいたりける、德人あらばをひおとして、わかたう共に、けうあるさけのませてみやこに上り、夏もすぎ秋風たゝば、北國にかゝり、國へ下らんとて、やど〳〵山家山家にをし入、をしとりてぞのぼりけり、その夜かゞみのしゆく長者の軒をならべてやどしける、ゆりの太郎、ふぢさはに申けるは、みやこに聞へたる吉次といふ金あき人、奥州へ下るとて、おほくのうり物をもち、こよひ長者のもとにやどりたり、いかゞすべきといひければ、ふぢさは